

『生態人類学は挑む』シリーズを読む ヒトはなにと 共生してきたのか？



シリーズ全体に底流する「共生」——ヒトと自然の共生，自然と文化の共生，他者との共生など，それぞれのフィールドから見えてきた，私たちの価値観を揺るがすような共生のあり方を紹介し，参加者とのトークセッションを通じて，シリーズを読み解きます。



2023年1月20日(金) 18:30~20:00

於 紀伊國屋書店新宿本店 3F アカデミックラウンジ

■お申込は Peatix サイトで <https://peatix.com/event/3437236/>

参加無料 12月20日より上記サイトで「座席のご予約」を承ります(先着17名)

お申込には Peatix アカウントが必要です。お持ちでない方は、新規登録の上お申し込みください。オープンスペースでのイベントですので、立ち見にてご覧いただくことも可能です。



話題提供者



河合 文 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教

若手の執筆者として MONOGRAPH 5『川筋の遊動民バテツ：マレー半島の熱帯林を生きる狩猟採集民』を著した。川の名を与えられ，川とともに生き，川のもとで死ぬ彼らの定住しない生活が，私たちの風景を揺るがします。



篠原 徹 国立歴史民俗博物館名誉教授・滋賀県立琵琶湖博物館名誉館長

シリーズ企画の仕掛け人(発起人)であり，シリーズの刊行を背後で支え，牽引してきた。トークではシリーズ全体について刊行の経緯や目論見に触れつつ，生態人類学というユニークな学問的営為の独自性と魅力を語ります。

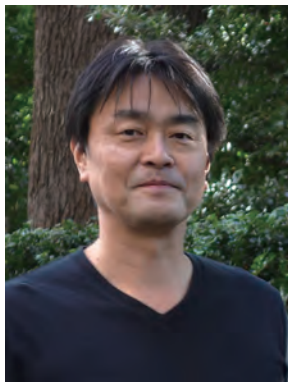
河合香吏 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授

シリーズ副編集委員長として，編集・刊行に実働部隊として関わってきた。また SESSION 5『関わる・認める』の編者。本書の大きなテーマである「共生」の諸相についてトークします。



梅崎昌裕 東京大学大学院医学系研究科教授

パプアニューギニア高地をフィールドに，サツマイモを栽培する人々を研究。MONOGRAPH 9『微生物との共生』を執筆。私たちの腸内に1キログラムほど存在するといわれる細菌が，ヒトの適応と進化に果たしてきた役割に迫ります。現代人は細菌をもっと大切にするべきでは？



■主催 紀伊國屋書店

■共催 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・基幹研究(人類学)／科学研究費補助金基盤研究(S)「社会性の起原と進化：人類学と霊長類学の協働に基づく人類進化理論の新開拓」／東京外国語大学フィールドサイエンスcommons